

水稻種子生産の基本技術

令和 8 年 3 月
大里農林振興センター

採種ほ（キヌヒカリ）の栽培暦

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	備考
生育ステージ	(は種)	(田植) 分けつ始	最高分けつ期	出穂期 乳熟期	糊熟期 成熟期	収穫期	優良種子生産の目標 ・発芽率 90%以上 ・異品種の混入 絶無 ・種子伝染性病害 絶無
各種作業	は種 異品種混入防止	育苗 田植 標札立て	中干し 漏生株抜き	雑穂 病雑 害穂 防抜 除き	雑穂・雑草抜き	収穫製 ・乾燥 異品種 混入防止	いもち病・ばか苗病・ もみ枯れ細菌病・ イソカレチウム ・籾水分 14.5%

栽培のポイント【混種防止のために】

1 確認作業

- ・原種を配布されたら、品種名、数量を確認する。
- ・田植前に近接田が同一品種か確認する。
- ・埼玉県指定種子生産ほ場であることを示す看板を設置する。
- ・採種ほ場は、前作に同じ品種を採種したほ場に、同一品種の採種を行うことを原則とする。

2 健苗づくり

- ・消毒、浸種、催芽時には、ラベルを付けて区別して作業する。
- ・は種後は採種用と区別できるよう、苗箱にラベル等をつける。
- ・薄まき（苗箱1箱当たり催芽籾で130g以下）にする。
- ・は種時または出芽後に苗立枯病予防剤を散布する。

3 施肥

- ・基肥成分は窒素成分で4kg以内に控える。ただし、近年は高温による肥料切れが著しいため、**窒素成分1~1.5kg程度の追肥成分**（先入れ追肥などの緩効性肥料）を施用すると、収量や品質が安定する
- ・ケイカル等の土づくり資材を施用する。高温年には、鉄やマンガンを含む資材を使用すると還元害を抑制できる

4 田植え前後の管理

- ・栽植密度：55~70株/坪（55株/坪：条間30cm 株間20cm）
- ・浮苗は取り除き、補植は行わない。
- ・病虫害防止のため、余り苗は、ほ場に置かず早めに処分する。

5 除草

- ・畦ぬりとほ場の均平化で除草剤の効果を高める。
- ・除草剤散布時は深水にして、散布後数日間は入排水を避ける。
- ・やむを得ず入排水するときは土が動かないように水面の表面のみで水が流れるように緩やかに行う
- ・種子や果実の大きい雑草（ノビエやクサネム、ホソバヒメミソハギ）や小さい穂のまま残る雑草（ホタルイ）は調製による除去が困難であるため、防除や抜き取りを行う。
- ・小麦栽培中の2~3月頃のトレファノサイド施用はヒエの発生抑制が期待できる。また、代かき同時施用除草剤等を導入すると、中後期除草の手間が減り省力的な除草が可能になる

6 水管理

- ・中干しは田植え後25日~30日頃に、田面に小ひびが入り足跡がつく程度に行う。
- ・中干し後は、出穂期の前後各一週間深水で管理する以外は、根の活力を維持するために間断かん水を行う。
- ・落水は出穂期後30日以降とし、早期落水はしない。

7 病虫害防除

- ・箱施用剤は、縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカと、内穎褐変病に登録のある薬剤を選定する。
- ・出穂後まもなくイネカメムシに加害されると不稔となり減収し、出穂10~14日後頃に加害されると斑点米となり品質低下する。そのため、イネカメムシの被害を防ぐには出穂期頃・出穂7~10日後頃の2回の防除が必要である。
- ・穂ばらみ期~穂ぞろい期に高温多湿だと穂枯性病害（もみ枯細菌病、ごま葉枯病等）が多発するため、ブラシンプロアブル等で防除する。一方、冷涼多湿だといもち病が発生しやすい。

8 異形株の抜き取り

- ・**疑わしい株は抜き取る！**
- ・1回目→7月中旬~下旬（中干し前）に行う。
- ・2回目→出穂始~穂揃期までに行う。
- ・3回目→成熟期から収穫期にかけて行う。
- ◎抜き取りのポイント
漏生株、草丈、出穂・熟期、芒の色・長さ、穂相・草姿など

9 収穫

- ・コンバインの掃除を徹底する。
- ・収穫は、主食用よりも5日程度遅くする。穂発芽の危険性が高まったら可能な限り早刈りする。
- ・発育予測プログラムも参考にすると作業時期を決めやすい
- ・籾水分は25%以下で収穫する。
- ・コンバインのこき胴回転数は種子用に下げる。
- ・倒伏や成熟ムラがある場合は刈り分けを行い、種子としない。

10 乾燥・調製

- ・乾燥機の掃除を徹底する。
- ・送風温度は40℃以下で行い、急激な乾燥は行わない。
- ・仕上げの籾水分は14.5~15.0%とする。

<参考>採種栽培おすすめ省力技術

近年の採種栽培の傾向を踏まえた、おすすめの省力技術を紹介します。

・先入れ追肥



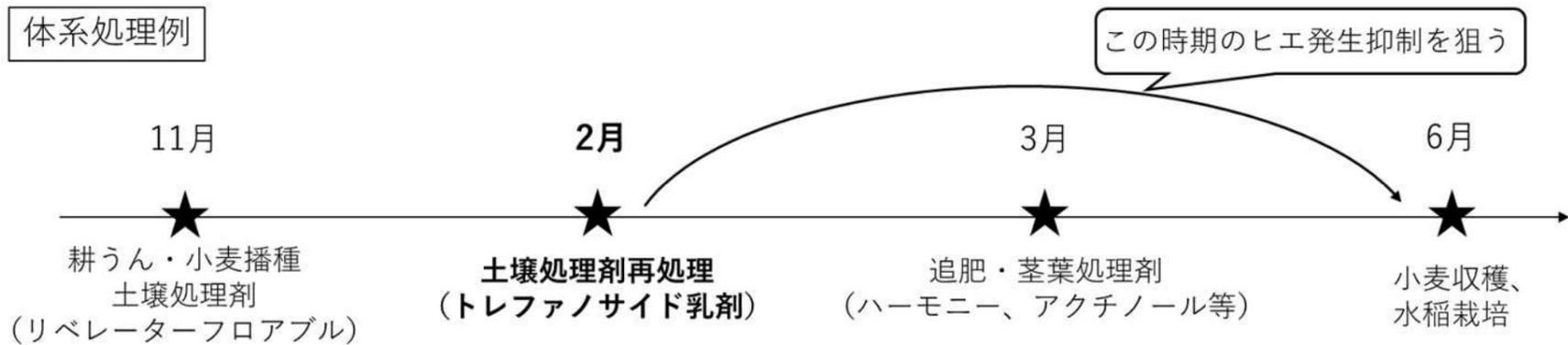
被覆尿素が穂肥時期頃に溶出し、穂肥を省略できます
(40日2.5%、60日:7.5%含有)

N以外にもKや微量元素も含み、土壌改良効果があります

窒素成分(kg/10a)	実物施用量(kg/10a)
1.0	10
1.5	15
2.0	20

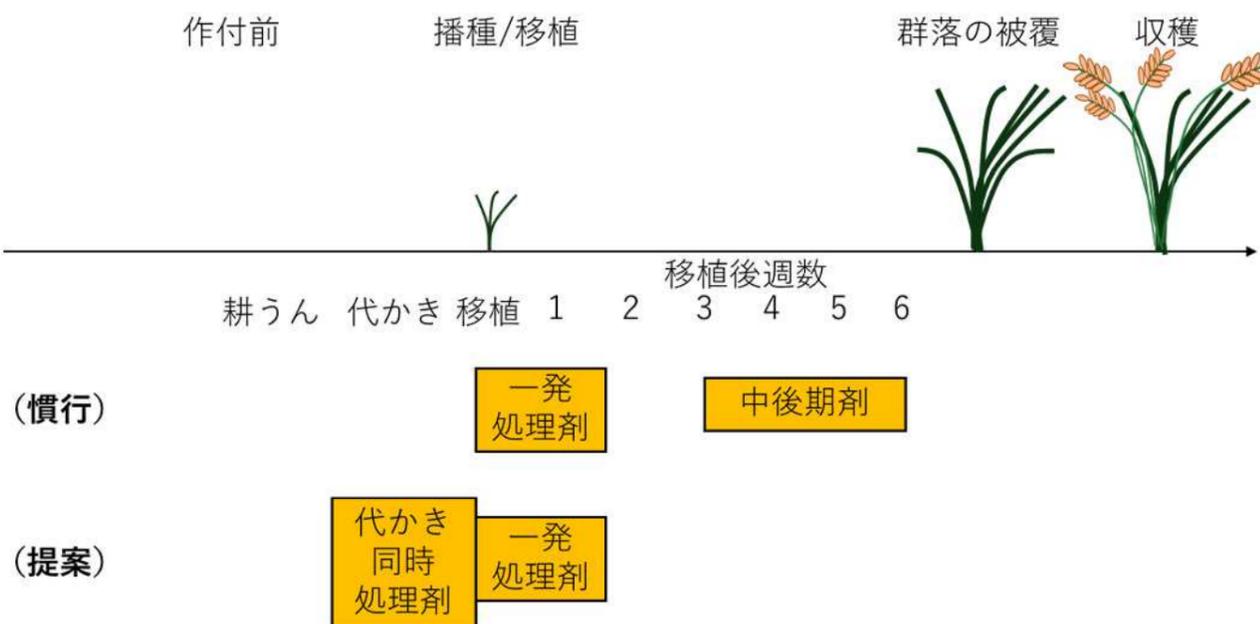
採種栽培ではあまり過剰な施肥をしないことが推奨されてきましたが、近年の高温傾向で、基肥成分のみでは安定的な収量確保が困難になってきました。そのため、窒素成分で1.5kg/10a程度の緩効性成分をあらかじめ施用しておくことで、収量や品質が安定すると考えられます。

・小麦栽培中のトレファノサイド処理



麦あと栽培では、麦栽培後期にヒエが発生し、代かきや一発処理剤でも除去しきれずに残る場合が散見されます。そこで、2月中旬頃に土壌処理剤であるトレファノサイド乳剤を散布し、3月頃の麦雑草発生と5月頃のヒエ発生の両方の抑制を狙うことで、その後の栽培管理を省力化できます。

・代かき同時除草



<https://www.nissan-agro.net/flyer/?ProductsID=353>

中後期の茎葉処理剤に頼る体系では、繁忙期かつ暑い時期の防除となり適期を逃しやすいため、農閑期の作付け前の防除や、代かき同時施用などを活用して初期を重点化することで、中後期除草が必要なほ場の割合を減らすことが、安定多収につながります。例として、ここではデルカット乳剤の代かき同時施用後に、通常の一発処理剤を施用する初期集中型の除草体系を紹介しています。農薬を使用する際は、必ず使用農薬のラベルで希釈倍率や使用量、使用方法等を確認し、散布の際は周辺への飛散防止に注意しましょう。